

平成21年度 第3回社会教育委員の会議 会議録

- 1 開催日時 平成21年12月21日(月)  
午前9時00分～午前11時10分
- 2 開催場所 宇都宮市役所 14大会議室
- 3 出席委員 18名  
廣瀬委員長, 熊本副委員長, 田中委員, 小林委員, 九津見委員, 石嶋委員,  
檜山委員, 櫛淵委員, 山野井委員, 大出委員, 塚田委員, 青木委員,  
郷間委員, 岡村委員, 柳田委員, 石澤委員, 千保委員, 磐井委員
- 4 会議の公開・非公開の別 公開
- 5 傍聴者 0名
- 6 議 事
  - (1) 報告事項
    - ①第51回全国社会教育研究大会について
    - ②第40回関東甲信越静社会教育研究大会について
    - ③平成21年度宇都宮市地域教育活動支援補助事業の結果について
  - (2) 協議事項
    - ①平成22年度社会教育関係団体に対する補助について
    - ②今後の「成人教育」について(第2回)
- 7 その他
- 8 閉会
- 9 発言の要旨

廣瀬委員長	それでは、会議次第に基づき、本日の議事を進めてまいります。 報告事項が3件、協議事項が2件ございます。 まず、報告事項①「第51回全国社会教育研究大会について」であります。こちらは、7月の第1回会議にて、山野井委員と真壁委員に参加していただくことで決定しておりましたが、真壁委員はご都合により欠席となりましたので、代わりに事務局が出席させていただきました。 それでは、まずは山野井委員から、大会の概要と参加された分科会の感想などをご報告いただきたいと思います。
山野井委員	それでは、第51回全国社会教育研究大会についてご報告いたします。

10月28日から30日まで、熊本県熊本市に行かせていただきました。大会スローガンは「みんなでやまっしょい 夢を紡ぐ社会教育を!!」、研究主題は「社会教育の新しい方向性と担い手の創造」ということで、熊本市崇城大学市民ホールを中心に研究大会が行われました。資料を見ていただくとわかります通り、下の方に広告が載っているということが一つの特徴かと思われます。また、新型インフルエンザの影響がありまして、全ての会場で参加者にマスクが配られたことも印象に残りました。主催者の発表では、1700人余の方の参加があったということで、全体的に大盛況だったと感じました。日程としましては、2日目の基調講演、シンポジウム、そして3日目の分科会に出席してまいりました。

まず、熊本県知事の蒲島郁夫氏による基調講演について報告させていただきます。蒲島氏の経歴としましては、地元の高校を卒業後、農協に勤務され、農業研修生として渡米されました。アメリカの大学で農学部に入って勉強し、将来を嘱望されましたけれども、方向転換してハーバード大学に入り、政治経済学博士とされました。帰国後33歳で筑波大学の社会工学系の教授、そして東大の教授となり、平成20年4月には知事に当選されまして、現在1期目をお務めになっいらっしゃることです。

講演の内容は、一口に言いますと、蒲島氏の子ども時代から知事になるまでの成功物語で、非常に精力的な形でお話をされていました。蒲島氏は9人兄弟の7番目として生まれ、満州からの引き揚げ者の両親の元で、厳しい生活を送りました。わずか20アールの田んぼで11人家族だったということで、高校卒業までは白いご飯を食べたことがなく、さらにはご自分でも小学校2年生から高校まで新聞配達をされていたそうです。そういった苦勞の経験を含めながらのお話でしたけれども、とにかく自分は、夢を持ち続けたと。牧場主になること、政治家になること、知事になること。そして、それを実現して知事となった今、今度は小説家になりたいという夢を持っているそうです。「人生は、期待値を超えるための120%の努力をすることだ」「人をほめることは、やる気を起こさせる源である」「人生の可能性は無限だ」「逆境の中に夢がある」などといった言葉を出しながら、精力的で熱い講演をされ、非常に感銘を受けて戻ってまいりました。

続いてシンポジウムについてですが、テーマは「新しい社会教育の方向性と担い手の創造」ということで、全国社会教育委員連合会長の大橋氏がコーディネーター、3名の方がシンポジストでございました。それぞれのお立場からの発言でしたけれども、基本的に、社会教育とは「まちづくりの立場に立ち、地域・行政・ボランティアの協働」であって、社会教育の原点に立ち返るべきである、というような形でシンポジウムが締めくくられました。

次に、私が参加しました第3分科会「地域の教育力」についてご報告いたします。まずは、「学校・家庭・地域の連携の推進」の実践ということで、兵庫県豊岡市の生涯学習課長から事例発表がありました。豊岡市は、生涯

学習の拠点として公民館活動を重視し、整備計画に基づいて新築、旧庁舎活用、改修という形で29館を整備して、学校・家庭・地域三者の連携を図りながら各種の事業を推進しているそうです。大きな柱としては、学校・家庭・地域の連携に向けた教育行動計画を作成・実践しているということで、具体的には子どもの野生復帰大作戦という取り組みが挙げられております。さらに生涯学習の拠点としての公民館活動の推進のため、幼児から高齢者までが一緒になって文化・教育・スポーツ活動を展開しているとのこと。他には、学校支援地域本部事業の推進として、市内20の小中学校に学校コーディネーターを配置し活動していることや、青少年健全育成会議を立ち上げて、町内会・PTA・学校・公民館などそれぞれの立場の方が参画し、一体となって事業を展開していることなどが発表されました。

続いて、二つ目の事例「地域における目標の共有化とネットワーク型行政の推進」ということで、島根県松江市の古志原公民館館長から「子どもを核とした循環型社会教育の推進」についての発表が行われました。古志原公民館は、地区の公民館運営協議会が指定管理者として自主運営しており、生涯学習、地域福祉、青少年の健全育成、まちづくりといった地域課題を公民館の事業の中に反映させた活動をしているそうです。地域の子どもは地域で育てる、という意識を強くして、「子育て・青少年育成」「安心安全」「福祉」を地域づくりの重点テーマとしております。様々な青少年育成・子育て支援事業を行っており、内容的には本市と似ている部分も多いと感じましたが、松江市の特徴としては、市内の工業高校生との連携にかかる取り組みが印象的でした。他には、放課後子ども教室の実施や、地域教育協議会の設立などについて報告されましたが、これらについては本市の方が先を行っているというような感じを受けました。

トータルの感想としては、全体会も分科会も用意された座席が足りないくらいの参加者がありまして、この全国大会への期待が高いということを実感いたしました。また、基調講演や分科会における発表では、発表者・発表団体の長年の地道な歩みの実績が読み取れて、大変参考になり、本研究大会への参加の意義を感じて帰ってまいりました。

廣瀬委員長

ありがとうございました。それでは続きまして、事務局より報告をお願いします。

事務局

第2分科会「家庭教育支援」についてご報告いたします。研究主題は「家庭教育力の向上を図る社会教育のあり方」、研究・討議の視点は「①親育ちを支援する学習機会や情報提供のあり方、②家庭教育を社会全体で支援する体制づくり」でございます。

話題提供者は北海道千歳市生涯学習課で、「親育ちを支援する学習機会や情報提供のあり方の実践『男性のための子育て講座』」という発表でした。

千歳市は自衛隊の駐屯地になっておりまして、北海道で一番平均年齢が若い街だそうです。必然的に、子育てについての学習機会は、行政やPTA、子育てサークルなどが主体となって広く実施されておりますが、圧倒的に女性の参加者が多く、企業に出向いて講座を行っても男性の学習意欲が低い状況だったということでございます。

そこで、家庭教育事業について3点の見直しを図ったそうです。まずは、教える側から教わる側への一方的な学習提供ではなく、参加者に自発的に子育てについて考えてもらい、育児に関する自分なりの方向性を見い出してもらうこと。二つ目は、学術的育児理論ではなく、仕事や趣味を通して子どもとどのように関わってきたかを、事例や失敗談を交えて学習すること。そして三つ目は、講師を学識者に依頼せず、一般市民を「子育ての実践者」として講師に迎えることです。これらのポイントを整理し、一つの講座を、父親だけで参加する講義編と父子で参加する実践編の2本立てで行うようにしました。具体的には、資料がございます「子どもと挑戦！樽前山登山」「子どもと挑戦！酪農体験」「自然を学ぼう！昆虫採集」などの事業が実施されたということです。

本発表のまとめとしましては、親が自分自身で答えを探し、自信を持って子どもと向き合うことが親としての「育ち」であり、そのようなことを伝えてくれる地域の先生は身近にたくさんいる、ということでございます。以上、第2分科会の報告とさせていただきます。

廣瀬委員長

ありがとうございました。ただいまの報告について、ご意見・ご質問があればお願いします。

よろしいですか。ご質問がないようですので、引き続き、報告事項②「第40回関東甲信越静社会教育研究大会について」に入ります。こちらについては、私が参加させていただきましたので、大会の概要をご報告いたします。

基調報告として、全国社会教育委員連合副会長の上條氏からご報告があった後に、坂東眞理子氏による「学びのすすめ」という記念講演がございました。坂東氏は生涯学習を熱心に勧めており、学習することの個人としての意味、特にキャリアデザインとしての意味について丁寧にお話しされていました。また、社会においては個人の能力ばかりでなく、コミュニケーション能力やチームで動ける力、協働する力が求められており、そういった力を育てておかなければならない、という話でございました。

その他は、東京都の部会で地域教育推進にかかる報告を聞いてきました。こちらでは、学校支援コーディネーターについてなど、宇都宮市においても今後取り組まなければならない様々な課題を示唆的に見ることができ、非常に参考になりました。

なお、本大会の会場では、同時開催として「第21回全国生涯学習フェスティバルまなびピア埼玉2009」が行われていました。私がこれまで

見てきたまなびピアでは、市町村ブースや社会教育関係団体ブースが多かったのですが、今年は大学と専門学校のブースが多く、熱心にPR活動していたことに驚きました。生涯学習のトレンドも変わってきたかな、という感じがいたしました。

それでは、関東大会及び先ほどの全国大会の報告について、委員の皆様からご意見・ご質問・ご感想があれば、お願いいたします。

よろしいですか。事務局の方で、来年度の開催予定はわかりますか。

事務局 全国大会については、福島県郡山市で、平成22年10月27日から29日開催ということでございます。関東大会については、開催地は東京都ということですが、正式な発表は来年1月頃になる予定です。

廣瀬委員長 ありがとうございます。大会にはどなたでもご参加いただけますので、ご希望の方は、委員任期中にぜひ行っていただきたいと思います。それでは、大会の報告については、以上とさせていただきます。

続きまして、報告事項③「平成21年度宇都宮市地域教育活動支援補助事業の結果について」を事務局から説明願います。

事務局 【説明】

廣瀬委員長 ただいまの説明について、ご意見・ご質問はありますか。

社会教育委員の中で、この事業に関わった方は、どなたかいらっしゃいますか。簡単にご報告をお願いします。

櫛淵委員 宮の原小学校で、お父さんの会が主催した事業に地域の方々と参加いたしました。夜警や、流しそうめんの準備として竹割りや箸作り、お椀作りなどに協力してまいりました。

廣瀬委員長 ありがとうございます。176名の参加があったということ、宮の原地区はすごいですね。その他にいらっしゃいますか。

塚田委員 昭和地区のリーダー訓練に参加してまいりました。学校という家から近い場所に泊まるということで、保護者の参加もたくさんありました。戸祭山に行く予定でしたが雨に降られまして、グリーントラストの方々と体育館で活動したり、流しそうめんを行ったりして、子ども達にとっても喜ばれました。地域には自然を含め、たくさん良い素材があるので、これからも機会がありましたらまた近くで実施してみたいと思いました。

廣瀬委員長 ありがとうございます。他に委員で関わった方はいらっしゃいますか。

山野井委員 陽光地区のサマーキャンプに参加いたしました。小学生から大学生まで大勢の参加がありました。陽光地区では一般の大人の参加も多かったのですが、これは地区内全戸に案内を出して、どなたでも結構ですから参加してください、と呼びかけをした効果かと思えます。地域全体で事業を行うことを意図し、焦点を当てているという感じがありました。

廣瀬委員長 ありがとうございます。まさにこの事業の趣旨に即した進め方でした。全体の補助金額が75万円で参加者合計が1,454名ということですから、相当に効率の良い事業ですね。この事業について、ご意見・ご質問がありましたら、いかがでしょうか。

よろしいですか。それでは、報告事項を終了させていただきたいと思えます。

次に、協議事項に入ります。協議事項①「平成22年度社会教育関係団体に対する補助について」でございます。ここで、補助金に関する団体の委員の方々に、ご退席をいただきます。よろしくお願いたします。

では、事務局からの説明をお願いします。

事務局 **【説明】**

廣瀬委員長 いずれの社会教育関係団体も公共性が高く、補助金交付に値する十分な活動をしているとご説明いただきました。ここで意見交換をしたいと思えますが、委員の皆様から何かございますでしょうか。

山野井委員 それぞれの団体とも立派な活動をされていると思えますので、補助するということがよろしいのではないのでしょうか。

廣瀬委員長 原案通りで良いということですね。その他にございますか。

石嶋委員 私も過去には子ども会やPTAに参加しており、各団体とも活発に活動されていますので、山野井委員がおっしゃる通り、補助することはよろしいかと思えます。ただ、来年度も同じ予算額が確保できるのでしょうか。国においても事業仕分けなど厳しい状況ですが、このまま補助金の予算が確保できるといいと思えます。

廣瀬委員長 ありがとうございます。2名の委員の方から、原案通り支持するということがご意見いただきました。他にありませんでしょうか。

千保委員 各団体とも、それぞれの分野で地域に根差した活動をされているということがよくわかります。ユネスコ協会も国連ベースの非常に大きな視野から事業を行っていますので、宇都宮市にとって非常に大事だと思います。

石嶋委員のお話のように、事業仕分けが話題となっていますが、社会教育関係団体への補助金交付については地道な活動への支えということですので、やはり賛成したいと思います。

廣瀬委員長

どの団体もかなりの会員数を抱えております。ユネスコ協会については会員は少なく見えますけれども、活動によって恩恵を被る市民は非常に多いと思われまます。そういった意味で、いずれも公共性の高い団体であることから、3名の委員の方から原案通り支持するというご意見をいただきました。事務局の提案通り、補助を認めるということによろしいでしょうか。

一同

異議なし。

廣瀬委員長

では、この通り決定いたします。

事務局

皆様方からご賛同いただき、ありがとうございます。ただ、平成22年度の補助金の予算額につきましては、本当に厳しい財政状況にありまして、21年度と同額を確保することは困難かと思われまます。現在予算要求を行っているところで、正式には3月の議会で決定される予定ですが、その旨ご理解いただければと思われまます。

廣瀬委員長

予算獲得に向け、頑張ってくださいと思います。  
それでは、関係団体の委員の方々にご入室いただきます。

(関係委員入室)

廣瀬委員長

ただいまの協議をもちまして、事務局案通り、補助対象団体として認められました。今後とも諸団体の皆様の活発な活動を期待しておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。なお、補助金額につきましてはまだ決まっておられません。例年よりも厳しい状況ではございますが、議会を通過してから正式に決定となりますので、ご了解いただきたいと思われまます。

続きまして、協議事項の②「今後の『成人教育』について」に入ります。事務局から説明願います。

事務局

【説明】

廣瀬委員長

今後の協議の進め方についてのご意見を最初に伺って、それから協議に入りたいという意向でございます。

今後の協議の進め方については、資料にあります通り、今後第3回、第4回と協議して答申の素案を作っていくという流れになっております。いかがでしょうか。ご意見があればお願いいたします。

よろしいですか。それでは、今後の協議の進め方についてはご了承を得たということで、本日の協議内容に入っていきたいと思います。協議内容について、事務局から再度説明していただきます。その後委員の皆様には、前回のまとめを見ながら、意見交換を行う時間をとりたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

事務局

【説明】

廣瀬委員長

協議する内容が3つございます。協議内容の1・2については、参考資料1にあります前回の意見交換の結果を基に、ご意見やご感想をいただきたいと思います。また、今回は「成人教育」についていろいろなデータを用意していただいておりますので、それらへの感想など、どんなことでも結構です。皆様からの意見をヒントに、「成人教育」を整理していきたいと思っています。

それでは、協議内容1「学びの視点による“宇都宮の大人の目指す姿”とは」ということで、意見交換したいと思います。

田中委員

“宇都宮の大人の目指す姿”の中で、どこにターゲットを絞るのかということが大切かと思っています。まず、成人期というのがどこなのか。20代か40代か。高齢期というのは60代以上だと思うのですが、問題は成人期ではないかというふうに感じております。といいますのは、今回の調査でお答えいただいているのはほとんど60代と70代の方で、40代や50代の働いている方からのご意見がなかなか比較できないというのが現状です。よって焦点を絞るならば、私は40代50代の「成人教育」として目指すべき姿が、この答申を作るにあたっての核かと思っております。高齢期はパワーがありますので、高齢期についての課題は、彼らの社会参加をどう進めていくかということだと思っています。

廣瀬委員長

ありがとうございました。確かに成人と言っても対象が広いので、特にどのあたりに焦点を絞っていくかということは重要な問題です。他にいかがですか。

青木委員

今話を聞いており感じたことですが、親がPTAとして、子どもを通して学校と接している時には、積極的に活動していただけていると思います。しかし小学校から中学校、高校へと子どもが成長するにつれて、学校に対する親の参加率は下がっていってしまいます。子どもが大学へ行く、就職するという時期は一層参加が少なくなります。その20年くらいの間をいかにつないでいくかが重要なのだと思います。

自分でも、今いらっしゃるPTAの方々に、継続して活動してもらえよう意識付けがどれだけできるか、またそのような機会を作れるかという



ことを、委員の皆様からアドバイスをいただきながら、よく考えていかねばならないと感じているところです。

廣瀬委員長

ありがとうございました。PTAの30代・40代という世代が、まさに「成人教育」の主要な対象、ターゲットになるのだと理解しました。ではちょうどその世代にいらっしゃる檜山委員、いかがでしょうか。

檜山委員

ターゲットは絞った方がいいと感じますが、30代から50代というのは、男性も女性も多くが仕事に従事しているため、「成人教育」に関心はあっても参加できない方々がいると思います。自分としても、参加する意思はあるけれどなかなか時間が取れないという状態です。私はたまたま役をもらっている関係でこうした会議に参加させていただいておりますが、実際のところ普通に仕事をしていたら、このような会議で「成人教育」という議題について話していることすら知らない人が多いと思います。そのような人々にどうやって食い込んでいくかというところが重要なのですが、働いている世代へのアプローチという、なかなか効果的な手法が思い浮かばず、どうしても対企業という考え方になってしまいます。企業に日中の時間をとってもらって、学習に充てるようにしないと、個々に関心があっても難しいのではないかと思います。

廣瀬委員長

そうですね。企業への取り組みということで、田中委員の方から、県の生涯学習課で実施した企業向け出前講座についてご報告をお願いします。

田中委員

学校ではこれまでも、PTAなどを通して学習機会を作っていただいておりますが、20代から40代の家庭教育に意識が低い人達になんとか学んでもらおうということで、企業にて出前講座を行いました。親学習プログラムをワークショップ形式で実施しまして、昨年は企業9社でやらせていただきました。

廣瀬委員長

そのような取り組みが、栃木県内の企業で始まっているということですね。では、親学習プログラムを担当している石澤委員。企業への講座や成人に対する教育について、直接携わった経験からご意見いただければと思います。

石澤委員

20代・30代・40代の方々についての私の個人的な印象としましては、必ずしも家庭教育に対して関心が低いという訳ではなく、我が子に意識を注いでいる年代なのではないかと思います。我が子をどうしようかということに一生懸命で、市の子ども全体をどうしていきたいというところまではなかなか気持ちが向けられないのかなと感じております。

企業への出前講座については、私自身は経験がないのですが、実際に企

業へ出向いた別の指導者からは、就業時間内に講座を開いてもらえるのはとても良かったという感想を聞きました。企業に出ていくことは必要だと思うので、今後どんどん実施できたらと考えております。

廣瀬委員長

確かに、30代・40代がどういう世代かと考えますと、男性も女性も働いている人が多いことが特徴です。また、家庭教育といっても自分の子どもにしか目が向かず、宇都宮の子ども全体という視点をなかなか持ちにくいという現状が報告されました。その他にいかがでしょうか。

山野井委員

体育協会では、各地域で体育祭を開催しています。しかし体育祭に出てくるのはお年寄りと子どもが中心で、中間の年代が少ないのです。体育祭のメインである最後のリレーも、参加者がいないからやめようという意見が結構ありました。ですが、若い世代や中年世代も、出ない出ないと言いながら、いろいろな方法を使うと出てきてくれるんです。リレーの参加者として、20代・30代・40代・50代から1名ずつ出してくださいとお願いすると、初めは抵抗がありますけれども、最終的には一番文句を言っていた地域が優勝してしまうなんてことがあるのです。さらには、出てきた人達同士で連携が取れるようになったということも結構ありますので、やはりこれはやめるべきではないかと続けているところです。

体育協会では子ども達のいろいろな活動を行っていますから、当然まちづくりとも関わりが深いのです。私は体育協会という立場で、なんとか中年の方々の姿を見えるようにしよう、出番を作っていこうとずっと考えておりますが、それには、とにかく一人でも二人でも出てくれた人はありがたい、人と人の連携を大切にしていくことだと思います。若い人に特別なことを求めるのでなく、何でもいいから参加してよ、というスタンスでこちらがいたら、自分にはあまり力はないけどいいのかな、と思いながらも出てきてくれる人がいます。この、前に出てくれたことこそが第一歩で、そこから様々なところにつながっていく、いろいろな形で協力を願える突破口になると感じているところです。

大出委員

資料のアンケート結果を見て、頷けるところがいっぱいありました。私は4箇所の生涯学習センターで講座を持たせていただいておりますが、若い世代と比べ、50代や60代になってから講座に参加する方の学習効果はどうしても薄いように感じます。やはり20代や30代など若いうちから参加した人の方が、効果が上がりやすいのです。一般企業で働く人にとってはなかなか難しいという現状ですが、生涯学習センターやカルチャーなどに参加する機会を持てるよう、企業にもう少し協力していただけたらと感じております。

廣瀬委員長

協議内容1について、皆様からいただいたご意見をまとめますと、成人

期と高齢期をきっちりと分けた上で、特に30代から50代くらいをターゲットとして重視していく必要があるのではないか、ということです。ただ、この世代は仕事を持っており、家庭で子どもを育てているなど様々な条件があることから、どのような学習機会を整えていったらいいのかということをお考えになっていかねばなりません。

では、協議内容の2に入りたいと思います。「宇都宮の大人の目指す姿」を実現させていくためには」ということで、資料に目指すべき姿のキーワードが書かれていますので、これについて考えていきます。例えば、自分の子どもだけではなくて、周りの子どももまとめて一緒に良くしていくという考え方に変わっていくなど、具体的なご提案もいただければと思うのですが、いかがでしょうか。

岡村委員

成人期の問題点として資料にいくつか挙がっている中に、「世間の常識がわからず、モラルが低下している」というものがありますが、確かに現状としてそうなっているのだと思います。そして、そもそも自分達はそのことに気づいていない、認識していないということが問題である気がします。

また、「地域の行事や会合などへの関心が薄い」ということについて、どうすれば良いか考えてみました。私の地域では、まちづくり推進協議会をはじめとして様々な地域活動行事が行われていますが、それらを計画する際、できるだけ親子で参加できる行事にするよう心がけております。例えば、ふるさと教室は土日開催し、父親が出られるような内容にしています。また、私の地域には鶴田沼という景勝地があるので、そこに親子でハイキングに行き、自然を守る会の方々に案内してもらって一緒にけんちん汁を食べたり、文化財保護ボランティアのご協力を得て地域内の歴史探訪をするなど、親子ふれあいの一時を味わってもらえるような機会を作っているところです。

当初は、こちらから呼びかけても父親の参加が少ない状況でした。働いている年代は仕事の都合もありますが、私達は地域活動の場を可能な限り提供していくべきだと思うのです。すると、参加したAさんがBさんを誘って、BさんがCさんを誘って…とつながっていくことになりますので、徐々に良い方へ向かうのではないかと感じております。

また、体育祭のことですが、子どもも親も祖父母も参加してもらうには、そのための工夫が必要だと思います。私の地域では、子どもの数は減少していますが、親子3代リレーというメイン種目の出場者数は減りません。親子が活動できる場や行事を提供し、内容に工夫をしていけば、新たに参加者が増えていくと感じています。

廣瀬委員長

いろいろな工夫をすれば、30代から50代も出てくるのだということをおっしゃっていただきました。では、30代前後の親が来る幼稚園・保

育園ではいかがでしょうか。

磐井委員

保育園は親が送り迎えをしますので、意識の疎通が図れていると思います。また、親や祖父母対象の保育参観や行事などを通して、世代間交流も行われています。今ご意見にありましたが、モラルが低下しても本人がそれに気づいていない人が多いということについては、親自身が自分を振り返る、省みる機会をつくるということが大切だと感じます。体育祭や文化祭などの行事は地域全体で集まることになりますので、様々な人と触れ合う中で、この親はこうなのだなといった新たな気づきもあるのではないかと思います。

地域によっては積極的に世代間交流などの行事が行われていますが、核家族世帯のマンションが多い地域などは、他年代との交流が少ないことにより、モラルの低下した親が増えているところもあるのではないかと思います。資料には数多くの事業が出ており、広報うつのみやや自治会回覧で紹介されている訳ですが、自治会に未加入の人や新聞をとっていない人、マンション住まいで周りとの交流がない人などは情報を得ることができません。せっかく良いことを行っている、全市民に伝わっているかということ、そこが欠けているのかなと感じます。たくさんの良い事業を行っている宇都宮市ですから、もう少し情報が隅々にまでいくよう工夫するといいいのではないのでしょうか。それから、あまり枠を広げてしまうと大変ですから、小学校単位など地域単位で活動できるようにすること。ある程度行政が目的を持って計画してくださったものに沿って、地域が独自性を持ちながら、行事や事業を進めていってはどうかと考えております。

石嶋委員

昔の保護者と今の保護者を比べますと、昔は社会全体で子どもと向き合いしっかり見守っていましたが、最近は、まさに石澤委員がおっしゃられた通り、余裕がないように感じます。我が子しか、我が家庭しか見ていない。特に父親は忙しく、たまに幼稚園の行事にいらっしゃったお父さんに聞いてみますと、無理やり会社を休んで来ました、という方もいます。学校行事や幼稚園行事にはなるべく一生懸命出てきてくれる方向にはありますが、地域に出ていく余裕はない。地域の行事に参加するところまでは至っていないようです。よってどこの地域でも、人集めに四苦八苦している状況なのだと思います。

昨日私の地区で餅つきをやったのですが、お手伝いをしてくださる役員は皆高齢者です。参加者には子どもや親もいますが、お餅を食べ終わるとさっといなくなってしまう。お餅の持ち帰りは一切禁止、というような状況でやっております。

廣瀬委員長

そうですね。一緒に食べることに意味があるのですからね。

子どもを通してコミュニティーとつながっている大人が多い、というこ

とです。まちづくり組織の郷間委員，まちづくりに関わるのは圧倒的に高齢者が多いと思うのですが，30代から50代の参加状況というのはどのような感じですか。

郷間委員

組織の方には，普段30代から50代はほとんど参加していませんが，土日に行事を行うと，子どもを連れて集まってくれます。私の地域では，柳田緑地の蝶々の愛護会がありまして，各小学校のPTA会長や副会長にご協力いただき，小学4・5年生をターゲットにした活動を実施しましたところ，子どもと一緒に親もたくさん参加してくださいました。

まちづくりの後継者をこれからどうするかという問題がありますが，ある地区では，若い人に出てもらうため会議を夜の8時から開いたら，参加率が上がったという意見もありました。

廣瀬委員長

子どもを媒介として，若い世代とつながっているのですね。熊本委員はどのようなイメージをお持ちですか。

熊本委員

一昔前と全然違うことは，皆多くの情報を持っていることだと思います。情報量があることによって，他の人と関わらなくても過ごせてしまう。例えば子どもが病気になった時，親や周りの人に「こういう時はどうしたらいいか」と聞くのではなく，インターネットで病気について調べるといように，人と接触しなくても全ての物事が解決できてしまい，生活に支障がないのですね。そのまま自分の価値観ができあがってしまうから，人と関わることは面倒になって，人間関係が遮断されているという状況が生まれている感じがします。情報も，情報取得の手段も多い時代だからこそ，人同士のつながりというものをもっと重視していくべきかと思います。

また，子どもを介してということについてですが，実際自治会には入らなくても育成会には入りたいという人が結構いるようです。夏休みなどに育成会の行事があり，子どもがそこに出たいと言うので入れてください，というパターンがあるのですね。しかし，その時は参加していても，30代半ばから40代くらいで育成会が終わると，皆そこで地域の活動から離れてしまって，そのまま自治会へは移行されていないというのが現状のようです。なので，育成会から自治会へとスムーズに流れるよう，うまい方策があればと感じているところです。

廣瀬委員長

育成会やPTAなどは，子どもを媒介として多くの人に参加してもらえるチャンスがありますけれど，そこと自治会やまちづくり組織がうまくつながっていかないというご指摘でした。

それでは，協議内容の3「本市の『成人教育』の現状と課題について」に入りたいと思います。資料のデータから，様々なことが見えてきます。モラルの低下を解決するためには，学習することが必要だと思う人は多い

が、実際はなかなか学習行動に移れていない。生涯学習センターは、一旦行き出した人の利用頻度は高いものの、行くまでのスタートの部分が難しく、現在の利用者は高齢者と女性が中心となっている。また、社会的ルールを学ぶ講座の必要性は認識されていながらも、実際に自分で行くかという行かない人が多い、という結果も出ています。さらに、学習成果はすぐにまちづくりと結びつくのではなく、個人の充実などに活用されているようです。それはそれで悪いことではないのですが、社会的な活用へと向かうことはなかなか難しいということが書かれています。これらから見えてくる宇都宮市の大人像というものはいかがでしょうか、千保委員。

千保委員

アンケートを見て、私が感じたことなどをお話しさせていただきたいのですが、この十何年は、若者にゆとりを持ってというのがかわいそうなくらいの時代だと思います。今年の新卒者は就職も大変な状況ですし、30代40代にとっては、毎年ボーナスは下がるもの、という時代なのですね。そのような中で、あまり若い世代にターゲットを絞り過ぎてもどうかと思います。30代から50代くらいにターゲットを絞ろうとすると、首を絞めてしまうと言いますか、とても無理なことを吹っかけかねないという気がするのです。むしろ、先ほど報告事項でありました地域宿泊体験事業などを見ますと、ずいぶん参加して頑張ってくれているのだなど、個人的には感じております。したがって、まずは市や地域で現在やっていることを、地道にしっかり進めていただくことが大切なのではないでしょうか。委員の皆様のご発言にありました、各地域で行われている様々な取り組みを、もう1回でも2回でも増やしていく、種類を増やしていくなどということが、結果的に、目指している良い方向へとつながっていくのではないかと思います。

そもそも、宇都宮の大人の目指す姿というのは、成人も高齢者も皆、地域でもう少しこうできないか、こうしていったらいいのではないかということを考えていけば、見えてくる気がします。例えば、もっと挨拶をしようとか、高齢者であればもう少し外に出て体を動かそうとか、そういうことが大事なのかなと思います。そして、全ての大人にとって、地域活動や社会活動というものは共通して大切だと思いますので、こういうところにキーワードの一つを持ってきてはどうかと感じているところです。

また、せっかく「宇都宮の大人」ということで考えていく訳ですから、大きなところから、宇都宮の人ってこういう人だよ、これを目指しているよ、というようなことをイメージしたキャッチフレーズなり取り組みなりを、こちらの場でも検討し、取り入れてみても良いのではないかという感じがいたします。

廣瀬委員長

貴重なご意見ありがとうございました。柳田委員、地域コーディネーターとして学校支援ボランティアと関わっていらっしゃると思いますが、学習成果

の活用についてはどう思われますか。

柳田委員

30代・40代の方と関わることが多いのですが、その世代の方は、自分をどんなふうに出していいのかわからないという部分があるように感じています。もっと周りと関わり合いたいという気持ちは高くても、どのようにしていいか方法がわからなかったり、ちょっと難しそう、面倒かな、と自ら引いてしまったりして、とりあえず自分の興味のある方向に流れているのではないかと思います。資料で、目指す姿のキーワードとして「自己実現」や「責任ある立場」という言葉がありますが、その始めの一步がなかなか出せず、力を十分に発揮できていない方が多いということを感じています。

しかし、実は皆すごく良いものを持っていて、これまで経験したことをもっと地域や子ども達のために活用していけるはずなのです。ただ、一人で行動を始めることはすごく不安だし、自分を過小評価している方が多いのだと感じます。だから、こういうことができるじゃない、これに興味あるじゃないと、そのような方々を引っ張り出す人や機会が必要なのではないのでしょうか。誰かが引っ張ってあげることで、皆段々前に出てくるようになるのだと思います。

廣瀬委員長

地域と交流したい、地域で行動したいという欲求はあるのだということですね。九津見委員、学校から見て、30代・40代の方とのお付き合いが非常に多いと思うのですが、いかがでしょうか。

九津見委員

学校にいらっしゃる保護者には、非常に協力的な方が多いです。ただ、数は少ないのですが一部に声の大きな人がいて、その声が通ってしまう、かきまわされてしまうという現実があるのです。また、生活するのに精一杯な家庭も増えています。家族の姿がこちらに見えてくるような家庭は問題ないのですが、母親しか見えない、祖父か祖母しか見えないといった家庭も非常に多くなっておりまして、一口に対策や解決といってもなかなか難しい状況になっていると思います。

それから、熊本委員が先ほどおっしゃられたように、情報量が多過ぎてなかなか整理できないということも問題です。インターネットなどでは短時間でパッと情報を見ることができますが、その中には不特定な誰かの意見が数多くあふれています。そこで見たものをそのまま鵜呑みにしてしまうのは怖いかなと思います。保護者が子どもに関する情報を取り入れる時も、子どもは皆それぞれ違うし、家庭環境も様々だということを理解した上で対応してもらえるといいのですが、違いを理解しないまま突き進まれてしまうと危険だと感じております。

小林委員

私を感じておりますのは、石澤委員がおっしゃられたように、親の意識

が我が子に集中している，ということです。全体に目が向いていない上，皆仕事などで忙しく，PTAでフォーラムをやるからと全保護者に通知を出してもなかなか人は来てくれません。よく聞くのは，出てきてくれる人というのはいつも同じ人だということです。いろいろな団体が，そのような一部の人達を取り合いながらなんとか動員している状態なのです。我が子が大事なのはそれで良いと思うのですが，そこから視野を広げ，さらに一歩踏み出してもらうための工夫が必要かなと感じております。

また，皆さんの意見でもありましたように，親子で参加できるような事業を行うということが一つのポイントかと思えます。その際，大きな範囲で人を集めようとするのではなく，やはり地域密着型といいですか，コミュニティとしての活動が基本なのだと感じております。先ほど，地域で愛護会をお作りになっているという話がありましたように，子ども達に参加を促し，子どもと一緒に親を活動へと引き込む，そういう道筋を作っていくことが大切だと思います。

櫛淵委員

ここ2～3年宮の原地区では，大勢の方々に地域活動に参加してもらおうということで，行事の際婦人会ですいとんを出しております。最初は参加者が少なくて，お手伝いの人数の方が多かったので，すいとんをおかわりして食べている子ども達に，「今度はママも連れておいでね」と呼びかけました。次の年は凧作りを行いました，こちらも作ることを難しく感じたのか，参加者は多くありませんでした。それでも参加者の中には父親が結構いらっしゃったので，「子どもの行事に父親と一緒に出てくるようなご家庭ですと，お子様はきっと立派に育ちますよ」と声をかけて褒めるようにしました。その時もすいとんを作りましたが，皆さん親子でおかわりしてくださって，「こんなおいしいものをいただけるなら〇〇ちゃんもお誘いしよう」なんて声もありました。そして今年も募集をかけましたところ，口コミの効果が出てきたのか，100名近い希望者が集まったのです。ただ，今年は新型インフルエンザの影響のため開催できず残念でした。

廣瀬委員長

そうめんやすいとんなど，「食」のつながりは効果的なキーワードになっていますね。

塚田委員

子ども会連合会では皆さんに，まずは単位や地区の子ども会活動に力を入れてくださいとお願いしております。余裕があったら，さらに市全体の活動として子ども会連合会のお手伝いをさせていただければと思うのですが，単位や地区でさえ協力してくれる人が少ない状況です。やはり30代から50代は，生活に追われていて時間がないのだと感じます。

資料のデータの中で，生涯学習センターの利用経験がない人が70%以上ということなので，実際に利用者アンケートに答えた人はおそらく数%かと思えます。利用者アンケートでは，社会的ルールについて学びたい人



は少ないという結果が出ておりますが、生涯学習センターを利用している人は他に目的があって来ている人が多いでしょうから、社会的ルールを学びたいという人は他にたくさんいるのではないかと自分なりには感じます。腰を上げたいけど上げられず、出てこない人も多いでしょう。なので、腰を上げるのを手伝ってあげるような方法や周知啓発について、考えていくことが必要だと思います。

大出委員

生涯学習センターではいろいろな講座がありますが、基本的にそれぞれのセンターで設定しているのでしょうか。市民から希望を募ってその結果を生かすこともあるのかなど、お聞きしたいのですが。

事務局

生涯学習センター主催の各講座では、受講者からアンケートを取っております。その結果を元にしながら、いずれの講座についてもセンターの職員が評価と見直しを行った上で、次年度の講座を企画するようにしております。なお、講座を企画する際は、受講者をはじめ市民の皆様のニーズを重視しますが、それだけではなく、同時に、こちらの社会教育委員の会議でもお謀りいただいている市の生涯学習にかかる方針などについても、取り入れるようにしております。例えば、6回の講座であれば、市民のニーズに合わせた回と、市の生涯学習課として身につけてほしい内容を扱う回とを組み合わせ、両方を取り入れたような講座を企画しております。

廣瀬委員長

ありがとうございました。本日皆様からいただいたご意見を簡単にまとめますと、成人に学習機会を提供する際は、仕事や家庭など様々な条件に配慮しながら参加してもえるような工夫をし、そこから社会参画を促していくことが有効である、という意見が多くありました。今後はそのようなところから、宇都宮の大人の目指す姿へアプローチしていければと思います。

それでは、以上で本日の会議を終了させていただきます。活発なご意見をいただき、誠にありがとうございました。